

5S-3

遠隔地・分散開発における開発管理についての一考察
—ドキュメントを中心とした品質・進捗管理のあり方—

鈴木 健蔵 村松 睦朗 山本 勇次 腰原 貞利
富士通エフ・アイ・ピー(株)

1. はじめに

「遠隔地分散開発方式」では、開発工程毎の成果物に対して、品質・進捗管理のための管理指標を設定し、作業実績との差異により品質不良、進捗遅れ等の異常を把握する。検出を容易とするために、各成果物にはアラームポイントが設定される。

設計工程における成果物は、初期設計書、論理設計書といったドキュメントであり、これらに対しても管理指標を設定する。従来の品質・進捗管理の考え方は表1のとおりである。

本稿では、この考え方に基づく設計工程におけるドキュメントを中心とした品質・進捗管理のあり方について、実プロジェクトでの反省をふまえ、その改善策について報告する。

2. 従来管理方法に対する改善策の検討

管理対象データとして、品質は成果物に対するレビュー実施量(バグ指摘件数とレビュー時間の評価)であり、進捗は成果物の予定と実績の差異である。管理に用いる目標値(予定)の設定に当たっては従来、設計工程においても規模見積り(総生産量Kステップ)を基準として行ってきた。

表2は実プロジェクトでの論理設計書に対して行ったレビューの実績状況である。表中の目標達成率が示すとおり、A・B両拠点共でレビュー実

施量(時間)が少なく、レビュー指摘件数が多いという結果になっている。この原因として、(1)会議レビューを中心とした従来の集合形式による分散元の基準を、拠点リーグとの対面レビューが主体である分散先にそのまま適用しているため、人数により変動する延べ時間で集計されたレビュー時間は、目標より小さくなること、(2)自己レビューの実績結果が含まれていないこと、(3)論理設計書の記述において、プログラム設計レベルまで記述しているため、入出力カウントミス等の詳細な指摘件数までカウントされていること、が挙げられる。レビュー指摘内容の内訳は、表3に示すとおりである。

一方、表3の論理設計書の枚数について見ると、実績は予定の約1.5倍となっている。進捗は一見、進んでいるように見えるが、実際は(3)と同様に書きすぎているためであり、進捗把握の面からも十分な評価判断が出来にくいといった結果につながっている。これらの反省点に対する改善策として、次の点を考慮する必要がある。

- ・レビュー形態別の判断基準の設定
- ・自己レビューの実施量のカウント
- ・成果物(ドキュメント)の細分化による目標設定および記述レベルの標準化

表1 従来の品質・進捗管理の考え方

工程	システム設計	プログラム設計
品質管理	対象データ ①レビュー指摘件数 ②レビュー時間 (絶対時間、延べ時間) ③延べ時間=絶対時間×人数	}
	判断基準 ①指摘件数/Kstep ②基準内の幅(±20%以内)	
進捗管理	対象データ 設計書の枚数	}
	判断基準 設計書枚数の予実差(±10%以内)	

※チェックケル、拠点および全体管理者の管理範囲等は表中で省略

表2 レビュー実績状況

開発拠点	対象規模	区分	レビュー時間*		指摘件数		目標達成率**	
			目標	実績	目標	実績	レビュー実施量	指摘件数
A拠点	40k	拠点	242	162	145	212	-33%	+46%
			162	87	97	137	-46%	+41%
B拠点	31k	拠点	460	92	138	178	-80%	+28%
			154	57	46	87	-62%	+89%

拠:拠点 全:全体
*延べ時間 = 絶対時間×人数(自己レビュー含まず)
**目標達成率 = (実績値-目標値) / 目標値×100

表3 レビュー指摘内容の内訳

開発拠点	論理設計書枚数	拠点	全体	レビュー指摘内容の内訳	
				件数	内容
A拠点	予定:	76	76	A:業務レベル	内部要件・インクフェミスなど
	1200	9	13	B:外部要件	初期設計書記述レベル、ユーザ要件など(業務)
	実績:	8	17	C: "	サライ・リスト出力対応など(運用)
	1784	8	17	D:記述レベル	エラーメッセージ出力内容ミスなど(モレ、曖昧表現)
	計(件数)	212	137		

